引き継がれる研究・継続してさらに成果を挙げる！！

二改俊章先生（右）と打矢惠一先生（左）

今回、微生物学研究室を訪問し、二改俊章教授・打矢惠一准教授にお話を伺った。
訪問して最初に感じたことは、先生方の真摯な対応、学生の礼儀正しさ、整理整頓された実験室、研究室の明るい雰囲気である。

研究室は15年以上前から国立病院機構東名古屋病院の小川賢二臨床研究部長、名城大学特任教授と継続して共同研究、講義担当等の関係を築き、「臨床と基礎研究をつなぐ」「治療・薬の開発につながる」研究を実践してきた。
また研究室内でも、研究テーマが毎年上級生から下級生にそれぞれに引き継がれる土壌があり、今回以外にも研究成果を高く評価され、これまでに優秀論文賞等の受賞者（6名）を輩出している。最近では、第82回日本細菌学会総会（2009年3月12日～14日開催）において、当時修士2年市川和哉さんが優秀ポスター賞（優れた研究成果が高く評価された発表に授与）を受賞している。

学生を育てる

取材にご協力いただいた研究室の皆さん

お二人の先生に研究室での学生指導で気をつけていることを伺った。
あいさつに代表される社会人としての心構えの基本を指導し、学生に対して注意するときは曖昧にせずきちんと注意する。また、学会に行ったら発表するのは当たり前で必ず質問もする。質問することによりヒントを得たり、共同研究等につながる。これはお二人の先生の経験に基づくものだそうだ。

日常的には学生の英語読解力、文章力等を育てる意味から「書く」「英訳」「発表」を行っている。
学会の要旨は何回も手直しさせ、時間をかけて指導し、発表の練習を何回も繰り返す。繰り返すことにより学習し、上達する。

手直しも本人のためにならないので、最初から直さず自分で考えて文章を作らせる。
ただ、研究室の修士の学生は自分で実践し、専門書・論文をしっかり読んでいるとのことであった。

研究室内のチームワーク

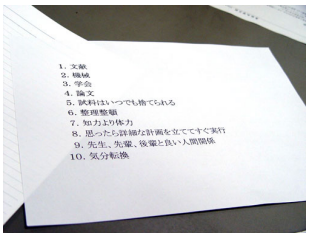
研究室運営は室内のチームワークを重視しており、教員・学生間で言いたいことを言える雰囲気を大事にし、学生も楽しく周囲と接する空気となっている。 記者らがお邪魔したときにまず感じた研究室の雰囲気はここから始まっていることがよく分かった。

秘密（ちょっとしたことを見逃さない）の実験

二改教授のお話の中で印象に残った言葉がある。それは「秘密の実験」という言葉だ。
研究している時にちょっとしたことを見逃さず、自分なりに試みる（先生に内緒で実験する）、これが大事で後に大きな成果につながった事例がいくつもあるとのことだった。これは、先生のお考えが学生の自主性を育み、育てるということだと理解した。

実験データの指導は「ネガティブなデータはポジティブな結果に繋がるので、結果が出ないとあきらめない」「試料はいつでも捨てられる、結果が出るまで保存する」「成功したときの感動を学生と相喜ぶ」という方針を一貫している。

後継者が自然に育つ研究室のキーワード



研究室で示されているキーワード

先生は謙遜されていたが、いろいろな指導・試みがあり、研究室には10か条のキーワードが存在し、これをバイブルにして学生生活を送らせる。大きく成長した学生を社会に輩出していく。
下記にそのキーワードを紹介する。

1. 過去の、そして他分野の文献も読む
2. さまざまな機器類をマスターする
3. 学会では質問する
4. 論文を書く
5. 試料はいつでも捨てられる
6. 整理整頓

7. 知力より体力
8. 思ったら詳細な計画を立ててすぐ実行
9. 先生、先輩、後輩とのよい人間関係
10. 気分転換

記事作成：学務センター　長沼嗣雄委員

取材概要	
日時	2010年10月1日（金）10時～11時30分
取材場所	八事キャンパス　7号館 601研究室
取材対象者	薬学研究科　二改俊章先生、打矢惠一先生
取材メンバー	薬学部 西田幹夫委員、学務センター 長沼嗣雄委員 大学教育開発センター 楯一也、神保啓子